



一般社団法人

日本糖尿病・妊娠学会 ニュースレター

The Japanese Society of Diabetes and Pregnancy News Letter

2026年 4月発行 Vol.28 No.1

第54号

第42回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会のご案内

テーマ：やせと肥満と糖代謝 ～母と子の未来のために～

会期：2026年11月13日(金)・14日(土)

会場：岡山コンベンションセンター（岡山市）

第42回日本糖尿病・妊娠学会
年次学術集会長

増山 寿

岡山大学学術研究院
医歯薬学域 産科・婦人科学

第42回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会は、「やせと肥満と糖代謝 ～母と子の未来のために～」をテーマに、2026年11月13日(金)・14日(土)の2日間、岡山コンベンションセンターにて開催いたします。このような歴史ある学会を再び岡山でお迎えできることを大変光栄に存じますとともに、その責任の重さを痛切に感じております。

妊娠・出産は、女性のライフコースの中でも大きな転機であり、その背景にある体格や糖代謝の状態は、妊娠転帰のみならず、出生児の将来の健康、さらには女性自身のその後の人生にも深く関わっています。近年、妊娠可能年齢女性における「やせ」と「肥満」という体格の二極化、そして糖代謝異常の問題は、私たち産科医・糖尿病診療に携わる医療者にとって、改めて真正面から向き合うべき重要な課題となっています。

若年女性の「やせ」は、月経異常や妊孕性低下にとどまらず、骨量減少を介した将来の骨粗鬆症リスクとも関連し、低体重/低栄養症候群という疾患概念も提唱されています。一方で「肥満」は、妊娠糖尿病や妊娠高血圧症候群などの周産期合併症に加え、児の肥満や糖代謝異常リスクの上昇とも関連することが明らかになっています。これらは、単に妊娠中の管理にとどまらず、プレコンセ

プションから産後、さらには次世代へと連なる課題です。

本学術集会では、妊娠前（プレコンセプション）から妊娠・出産、産後までを一連の流れとしてとらえ、体格や糖代謝の違いを踏まえた包括的な管理のあり方について、多角的に議論する場としたいと考えております。

現在、5つのシンポジウムを企画しています。「やせと糖代謝」「肥満と糖代謝」では、体格の両極に焦点を当て、それぞれが妊娠転帰や将来の健康に及ぼす影響について整理し、臨床における実践につなげることを目指します。

「GLP-1時代のウイメンズヘルス」では、近年、妊娠可能年齢女性において使用が急速に広がっているGLP-1受容体作動薬をはじめとする糖尿病・肥満治療薬について、妊娠への影響や予期せぬ妊娠時の対応、妊娠中の管理など、産科医・糖尿病内科医双方にとって避けて通れない臨床課題を取り上げます。

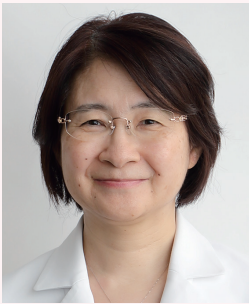
さらに、「基礎研究から発展する糖尿病と妊娠学」では、胎盤機能や代謝制御、次世代への影響といった観点から、基礎研究の成果をどのように臨床へ橋渡ししていくかを議論します。

加えて、「多職種協働で支える妊娠期の栄養・生活支援 ～やせ・肥満・糖代謝異常妊娠への包括的アプローチ～」では、管理栄養士、薬剤師、助産師、看護師など多職種が連携し、妊娠前から産後まで一貫して女性と家族を支える実践について共有したいと考えています。

本学術集会が、糖尿病妊娠診療に携わるすべての医療者にとって、日々の診療を振り返り、母と子、そして次世代の健康をどのように守っていくべきかをともに考える機会となることを心より願っております。多くの皆様のご参加を、会長として心からお待ち申し上げます。



第41回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会の開催報告



第41回日本糖尿病・妊娠学会
年次学術集會会長

荒田 尚子

国立成育医療研究センター
女性内科

皆様、こんにちは。第41回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会で会長を務めさせていただきました、国立成育医療研究センターの荒田尚子です。

2025年10月24、25日の東京での現地開催、そしてその後のオンデマンド配信を通じ、医師やメディカルスタッフ、学生の方々を含め、439名という大変多くの方々にご参加いただきました。皆様のおかげで無事に盛会裏に終了いたしましたことを、心よりご報告申し上げます。

今回は、私のキャリアテーマでもある「糖尿病領域のプレコンセプションケアを考える」をメインテーマに掲げさせていただきました。シンポジウムにて制度設計に向けた熱心な議論を交わしたほか、初の試みとなる全10講座の「教育セミナー」を開催し、皆様と一緒に包括的に学ぶ場を共有できたことは大きな喜びです。

また、私どもが事務局を務める「DREAMBee研究」も10年の節目を迎えました。特別企画フォーラムでは、これまでの貴重なデータを臨床現場でどう生かすか、そして次のステージへ向けた熱い思いを皆様と共有することができました。ほかにも、妊娠初期の耐糖能異常や母児のライフサイクルに関するシンポジウム、高校生からの新鮮な提案をいただいた会長企画、吉田文香先生による若手奨励賞受賞講演など、非常に充実した時間を過ごすことができました。

そして、会長講演におきまして、われわれ会員の偉大な恩師である大森安恵先生に座長を務めていただけたことは、私自身、胸がいっぱいになるほどの感動的な経験でございました。

本学術集会の準備や運営にご尽力いただいた関係者の皆様、杉山理事長をはじめとする役員の方、そしてご協力いただいた企業の皆様に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

次回は2026年11月13日、岡山コンベンションセンターで開催されます。皆様と笑顔で再会できる日を、心より楽しみにしております。



糖尿病プレコンセプションケア教育セミナー

糖尿病プレコンマイスター養成講座

第41回日本糖尿病・妊娠学会学術集会への参加申込

プログラム コーディネーター：三小田亜希子（成育医療研究センター）

- 糖尿病プレコンマイスター制度の意義と役割** 荒田 尚子（成育医療研究センター）
- 糖尿病をもつ女性へのプレコンセプションケア** 柳澤 慶香（聖マリアンナ医科大学）
- 妊娠糖尿病** 中川 朋子（聖マリアンナ医科大学）
- 産婦人科知識** 中西 沙由理（横浜市立大学附属市民総合医療センター）
- 糖尿病合併妊娠とDOHaD** 中野 有也（昭和医科大学江東豊洲病院）
- 周産期の栄養管理・運動管理** 山田 貴穂（新潟大学医学総合病院）
- 血糖モニタリング・薬剤** 佐藤 志織（成育医療研究センター）
- 周産期のメンタルヘルスケア** 池田 真希子（成育医療研究センター）
- 産後・インターコンセプションケア** 川崎 麻紀（成育医療研究センター）
- 実践！プレコンノート（糖尿病編）**（オンデマンド配信なし） 長村 杏奈（昭和医科大学病院）

学術集会オンデマンド参加で日本糖尿病療養指導士認定機構 更新研修単位（2群：2単位）を取得できます。

第41回日本糖尿病・妊娠学会学術集会内で開催中
オンデマンド配信：11月20日（木）10:00まで
対象：糖尿病診療・周産期医療に携わる医師およびメディカルスタッフ

第41回日本糖尿病・妊娠学会学術集会への参加が必要です。

学術集会参加費	会員	非会員
医師	12,000円	15,000円
メディカルスタッフ	8000円	
初期研修医/学生	無料	

主催：第41回日本糖尿病・妊娠学会学術集会（会長：荒田尚子）
共催：令和7年度こども家庭科学研究班（荒田班）

若手奨励賞を受賞して

吉田 文香

愛媛大学大学院医学系研究科
産科婦人科学講座

この度は、第41回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会におきまして若手奨励賞をいただき、本学会理事長であり日頃よりご指導を賜っております杉山隆先生、荒田尚子学会長、選考委員の先生方に心より厚く御礼申し上げます。また、本研究のご指導いただきました、愛媛大学大学院医学系研究科糖尿病内科学講座の高田康德先生、大澤春彦先生にも心より感謝申し上げます。今回の受賞論文“Interaction effect between low birthweight and resistin gene rs1862513 variant on insulin resistance and type 2 diabetes mellitus in adulthood: Toon Genome Study (J Diabetes Investig. 2024 Jun; 15 (6): 725-735.)”は、日本においても低出生体重 (LBW)

が将来の2型糖尿病 (T2DM) 発症リスクと関連することを示された横山真紀先生の先行研究を背景に、LBWとT2DM疾患感受性遺伝子リスクアレルがT2DM発症に及ぼす影響とその相互作用を解明することを目的としました。東温スタディの参加者1,021名を対象に解析した結果、*RETN* rs1862513 G/G型 (G/G) が、LBW群のT2DM有病率と関連し、LBW+G/G群では高率にT2DMを発症していました。また、T2DM有病率においてLBWとG/Gの間に相互作用を認めました。本研究により、環境因子の影響をうけるLBWと遺伝因子*RETN* rs1862513 G/Gを同時に評価することにより、将来のT2DMリスクをより正確に予測できる可能性が示唆されました。LBWに対して*RETN* rs1862513 遺伝子型を評価することで早期介入による予防対策が可能となる可能性があります。今後も研鑽を積んで参りますので、ご指導のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

メディカルスタッフ賞を受賞して

勘澤 晴美

国立病院機構長崎医療センター
産婦人科

第41回日本糖尿病・妊娠学会において「妊娠糖尿病既往女性の分娩後母体体重停滞 (PPWR)：産褥早期と産後8カ月のリスク因子」の研究がメディカルスタッフ賞の栄誉に浴しました。

昨年に続き連続で受賞できたことは指導医、研究チームのサポートがあり研究継続できた結果の賜物です。心より感謝申し上げます。

妊娠糖尿病 (以下GDM) 既往女性は将来の2型糖尿病発症のリスクが高く非妊娠時に肥満のあった女性はさらにリスクが高いことは先行研究からも明らかです。一方で非妊娠時肥満女性でも分娩後に体重を正常化できれば、糖尿病発症率を非妊娠時肥満のない女性と同じレベルまで低下させることができ、また肥満のなかった女性でも分娩後の体重増加が、糖尿病発症リスクを明らかに増大させていることも先行研究で明らかになっています。GDM既往女性の糖尿病発症の予防には分娩後の体

重管理が重要であり、本研究は、産褥早期 (6~9週) と8カ月の時点での分娩後母体体重停滞 (以下PPWR) の因子および母乳強度との関連性を検討致しました。

産褥早期および分娩後8カ月のPPWRはおおの48%および42%であり、GDM既往女性の半数弱に認めました。産褥早期のPPWRには非妊時BMIおよび妊娠時体重増加が関連し、母乳強度は関連せず、分娩後8カ月のPPWRには、非妊時BMIと妊娠時体重増加に加えて、産褥早期の母乳強度と産褥早期のPPWRが独立関連因子であることが明らかになりました。上記の結果より産後8カ月のPPWRの予防には、適正な妊娠時体重増加、母乳哺育、産褥早期のPPWRの解消 (非妊時体重への復帰) が有効である可能性が示唆されました。

GDM既往女性のPPWRの予防には、プレコンセプションからインターコンセプションケア、さらに長期の産後フォローアップの必要性が高いことも改めて認識する機会となりました。

PPWRについては5年後までの長期予後の特徴についても研究中であり今後発表していく予定です。

メディカルスタッフ賞を受賞して

林 文子

愛知医科大学
看護学部

第41回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会において「生殖可能年齢の健康な日本人女性における体組成と糖代謝の関連」を発表し、栄えあるメディカルスタッフ賞をいただきました。誠に光栄に存じます。発表の機会を賜りました年次学術集会長の荒田尚子先生をはじめ、学会の諸先生方に厚く御礼を申し上げます。また、研究をご指導いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

これまで健康な妊婦や妊娠糖尿病（GDM）妊婦を対象に、血糖管理に日常歩行が有効であることを報告してまいりました。従来の栄養指導に身体活動の視点を加えることで、妊婦による日常生活のセルフモニタリングが容易となり、良好な血糖管理に向けた行動変容が期待できると考えられます。さらに、新型コロナウイルスによるパンデミック前後で非妊時BMIや妊娠中の体重増加

に変化がないにもかかわらずGDM有病率の上昇が報告されたことで、身体活動も注目されるようになりました。

今回の研究では、妊娠を希望する女性の体組成と糖代謝を調査いたしました。BMI区分（低体重・普通体重・肥満）別に空腹時血糖値を比較すると、肥満群で有意に高値でした。さらに、非肥満群では体脂肪率と血糖値に、肥満群では筋肉量と血糖値に相関が見られました。体組成計で測定した筋肉量には異所性脂肪が含まれるため、肥満者では、体脂肪より異所性脂肪のほうが影響を及ぼしやすいことが示唆されました。脂肪の蓄積には生活習慣が影響することが知られています。近年、実験動物において、運動不足の状態に朝食欠食の習慣が重なる、体重は変わらずに内蔵脂肪が特異的に蓄積することが報告されました。これらの研究をふまえ、今後は妊娠を希望する女性を対象に、適切な栄養摂取に加え、朝食摂取や活動的な生活を促す保健指導を検討してまいりたい所存です。今後とも学会を通じて諸先生方からご指導・ご鞭撻を賜れますと幸いです。何卒よろしく願い申し上げます。

メディカルスタッフ賞を受賞して

柳生田 紀子

新潟大学大学院医歯学総合研究科
血液・内分泌・代謝内科学
新潟大学医学部保健学科
看護学専攻母性看護学・助産学
助教



第41回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会において持続血糖モニタリング（CGM）を用いた授乳による血糖変動と疲労感に関する研究について発表し、メディカルスタッフ賞を受賞いたしました。これまで私の研究を支えてくださった先生方、そして貴重な発表の機会を提供していただきました学会の先生方に心より感謝申し上げます。

授乳直後の疲労感の訴えは、産後の女性からしばしば聞かれます。授乳に伴う血糖変動が産後の疲労感の一因となっている可能性に着目し、本研究の着想を得ました。本研究では、Free Style リブレを用いて、糖代謝異常をもたない女性を対象に、授乳前後のグルコース値と主観的疲労度について検討しました。今回報告した

4名の結果では、全員において授乳後30分までの時間的推移におけるグルコース値の低下傾向が認められました。本研究は糖代謝異常をもたない女性を対象としましたが、授乳に伴う血糖低下傾向が認められたことから、今後は糖代謝異常をもつ女性における血糖管理への応用についても検討が必要であると考えています。一方、主観的疲労度については3名で授乳後に上昇が認められましたが、グルコース値と疲労感との関連については明確な相関を示すには至らず、今後は対象者数を増やしたさらなる検討が必要です。

これらの結果を踏まえ、現在は糖代謝異常をもつ女性にも対象を拡大し、研究を継続しています。授乳による血糖変動と疲労度の関連が明らかになることで、産後の適切な補食（量やタイミング）や授乳支援の発展に寄与できると考えています。また、産後の心身の疲弊は産後うつ病につながるということが知られており、授乳期において適切な看護支援を行うことは、産後女性のメンタルヘルス支援にもつながると考えられます。本研究が、授乳期にある女性に寄り添う看護・助産支援を含めた周産期支援の発展に寄与することができれば幸いです。

トピックス



森川 守

関西医科大学
産科学・婦人科学講座

「WHO recommendations on care for women with diabetes during pregnancy」が発表されました

<https://www.who.int/publications/i/item/9789240117044>

2025年11月の世界糖尿病デー（テーマ「Diabetes across life stages」）に世界保健機関（WHO）は妊娠中の糖尿病（DM）ならびに妊娠糖尿病（GDM）女性のケアに関する推奨（具体的なケア基準）を発表した（計27項目、[]は推奨項目の該当番号）。

食事・身体活動・体重管理の個別アドバイス [1]、妊娠前教育 [2]、多職種連携の専門ケア [3, 4]、血糖自己測定（SMBG） [5]、持続血糖測定（CGM）システムの使用 [6, 7]、HbA1c測定 [8, 9]、血糖目標の個別設定 [10]、薬物療法（1型DM [11, 12]、2型DM [13-16]、GDM [17, 18]）、

胎児モニタリング（超音波検査） [19-22]、網膜症スクリーニング [23, 24]、腎機能評価 [25-27]。

なお、1型/2型DM、GDMで一部推奨が異なる。CGM使用は2型DMとGDMで非推奨。HbA1c測定、網膜症スクリーニング、腎機能評価をDMでは妊娠初期または妊娠前から開始し定期的フォローを推奨し、GDMでは定期的フォローを非推奨。1型DMでは支障がなければ妊娠前と同種類のインスリン薬の同投与方法での継続を推奨。血糖コントロール不良な2型DMとGDMでは食事・身体活動のみからインスリンまたはメトホルミンの開始や単独療法から併用療法への変更を推奨し、支障がなければ妊娠前と同種類のインスリン薬の継続を推奨。血糖降下薬を服薬中の2型DMではインスリン or/and メトホルミンへの変更を推奨。DMでは早期からの定期的胎児超音波検査と妊娠中期での胎児異常と発育の評価を推奨。腎機能障害を有するDMでは血圧<130/80mmHgの維持ならびに必要に応じて降圧薬投与を推奨。

WHOは「妊娠中のDMの影響は世代を超える」と警鐘を鳴らしており、本推奨で産後フォローアップを含めた長期的ケアを求めている。

国内関連学会開催日程

第36回日本産婦人科・新生児血液学会学術集会

テーマ：産婦人科・新生児領域における血栓症との戦い

2026年6月26日（金）・27日（土）

会長：田畑 務（東京女子医科大学 産婦人科学講座 主任教授）

会場：一橋大学 一橋講堂 中会議場

公式ホームページ：<https://www.kuba.co.jp/jsognh36/index.html>

第31回日本小児・思春期糖尿病学会年次学術集会

テーマ：チームの絆で紡ぐ糖尿病医療

～共働で深まる連携、自分らしさが輝く未来～

2026年7月20日（月・祝）

会長：朝倉 俊成（新潟薬科大学 薬学部 臨床薬学教育研究センター）

会場：星薬科大学

公式ホームページ：<https://credoinc.jp/jspad31/index.html>

第50回日本女性栄養・代謝学会学術集会

テーマ：健康と未来 一食卓を科学する

2026年9月4日（金）・5日（土）

会長：高野 政志（防衛医科大学校 産科婦人科学講座 教授）

会場：ウエスタ川越

公式ホームページ：<http://www.academiasupport.org/jswnm50/>

第59回日本小児内分泌学会学術集会

テーマ：Local, Global, Synergy

2026年11月5日（木）～7日（土）

会長：山本 幸代（産業医科大学医学部 医学教育担当教員教育教授）

会場：北九州国際会議場、北九州メッセ

公式ホームページ：<https://orbit-cs.net/jspe59/index.html>

第41回日本糖尿病合併症学会年次学術集会

テーマ：持続可能な糖尿病合併症予防を考える。

～地域、経済、医療のクロスオーバー～

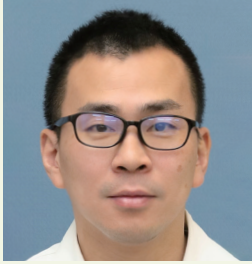
2026年11月20日（金）・21日（土）

会長：西尾 善彦（独立行政法人 国立病院機構 鹿児島医療センター）

会場：ライカ南国ホール、TKPガーデンシティ鹿児島中央

公式ホームページ：<https://site.convention.co.jp/41jsdc/>

トピックス



長野 伸彦

日本大学医学部
小児科学系小児科学分野

早産・低出生体重児の成人期の
インスリン抵抗性の要因

筋原性インスリン抵抗性

骨格筋はインスリンが作用して糖を取り込む主要な臓器で、体全体の糖処理能のうち最大70%を占める。骨格筋でのインスリン抵抗性により、摂取した炭水化物は筋肉でのグリコーゲン貯蔵よりも肝臓での脂質合成 (de novo lipogenesis) に転換される。近年、未熟性の強い早産児が成人期に至るまでインスリン抵抗性を示すとの報告が散見される。超低出生体重で出生した平均32歳の成人100例を対象とした報告では、正常産出生の成人と比べて4倍の耐糖能異常リスクがあると述べられている¹⁾。また163例の早産出生の成人を対象とした報告では、正常産出生の成人と比べて空腹時血清インスリン値やインスリン抵抗性指数 (HOMA-IR) が有意に高いと報告されている²⁾。その原因の一つとして早産・極低出生体重で出生した児が、5歳時点で正常産児に比べて除脂肪量 (主に筋肉量) が少ないとの報告や³⁾、低出生体重で出生した児が成人期において、筋容積減少や筋細胞機能異常を呈することが報告されている⁴⁾。

脂肪細胞の減少と肥大化

脂肪組織は過剰なエネルギーを中性脂肪として脂肪細胞内に貯蔵する役割を担う。脂肪組織が拡張できる範囲まではインスリン感受性の低下は生じにくい、拡張の限界に到達して過剰エネルギーを貯蔵できなくなると、インスリン抵抗性が急速に生じる。早産・低出生体重児は、正常産 appropriate-for-gestational-age (AGA) 児と脂肪組織の発達が異なる。具体的には、筋肉がつきにくく、体脂肪率が高い傾向であること、内臓脂肪など異所性脂肪が蓄積しやすい⁵⁾。生後早期の栄養摂取量やストレスへの暴露、成長ホルモンに対する感受性低下が関与していることが示唆されているが、その詳細なメカニズムはいまだ不明である。早産・低出生体重児は脂肪細胞数が少ないことから、1つの脂肪細胞に過剰なエネルギー貯蔵の負担がかかるため、早期から脂肪細胞が肥大しやすいのではないかとこの仮説が現在立てられている。

文献

- 1) Morrison KM, et al: Cardiometabolic health in adults born premature with extremely low birth weight. *Pediatrics*, 138, 2016
- 2) Hovi P, et al: Glucose regulation in young adults with very low birth weight. *N Engl J Med*, 356: 2053-2063, 2007
- 3) Gianni ML, et al: Boys who are born preterm show a relative lack of fat-free mass at 5 years of age compared to their peers. *Acta Paediatr*, 104: e119-e123, 2015
- 4) Jensen CB, et al: Altered skeletal muscle fiber composition and size precede whole-body insulin resistance in young men with low birth weight. *J Clin Endocrinol Metab*, 92: 1530-1534, 2007
- 5) Inami I, et al: Impact of serum adiponectin concentration on birth size and early postnatal growth. *Pediatr Res*, 61: 604-6, 2007

海外関連学会開催日程

28th European Congress of Endocrinology (ECE)

2026年5月9日(土)～12日(火)

会場: チェコ プラハ

公式ホームページ: <https://www.ece-hormones.org/education-and-training/european-congress-of-endocrinology/ece2026/>

American Diabetes Association (ADA)
86th Scientific Sessions

2026年6月5日(金)～8日(月)

会場: アメリカ ニューオーリンズ

公式ホームページ: <https://professional.diabetes.org/scientific-sessions>

64th Annual ESPE Meeting 2026

2026年9月8日(火)～10日(木)

会場: フランス マルセイユ

公式ホームページ: <https://www.eurospe.org/the-64th-annual-espe-meeting-2026-8-10-september-2026/>

56th PRS Annual Meeting

2026年9月18日(金)～20日(日)

会場: カナダ アルバータ

公式ホームページ: <https://perinatalresearchsociety.org/2026-prs-annual-meeting/>

62nd Annual Meeting of the European Association
for the Study of Diabetes (EASD)

2026年9月28日(月)～10月2日(金)

会場: イタリア ミラノ

公式ホームページ: <https://www.easd.org/annual-meeting/easd-2026/>

52nd Annual ISPAD Conference

2026年11月4日(水)～7日(土)

会場: ブラジル リオデジャネイロ

公式ホームページ: <https://2026.ispad.org/>

IADPSG Conference 2026

2026年10月8日(木)～10日(土)

会場: スペイン ジローナ

公式ホームページ: <https://conference-iadpsg2026.com/>